

目次

巻頭言 沖繩の声 日本政府と沖縄県政の対立を考える 松田勝承	1
●SNSでの投稿記事を紹介 歴史の発展とともに輝きを増す 仲條拓躬	2
◆【連載】 蜃気楼の国・満洲国 坂本進一	6
●石原莞爾の「戦後」を歩く③ 昭和天皇の御製⑧ 岩崎章次	9
●平成26年度収支表 総会報告 会員便り 法要のお知らせ	10
●書籍案内 編集後記	12

宣言(昭和31年協和会「昭和革新論」より)

- 1、人類歴史は最終戦争時代に突入し、世界の統一は眼前に迫った。われらは最小の犠牲をもって、新しい歴史を開こう。
- 2、都市解体、農工一体、簡素生活、この三原則によって新日本を建設し、搾取と戦争のない、人類次代文化の先駆となろう。
- 3、東亜に対する過去の態度を深く懺悔し、まず近隣と道義によって固く結び、ひいて永久平和の実現に邁進しよう。

沖縄の声

日本政府と沖縄県政の対立を考える



松田勝承

日本政府と沖縄県の対立が激化している。かつての自民党沖縄県連の幹部であった翁長雄志知事が何故、そこまで変わったのかということ、が分からないと、日本国民は、沖縄を見誤ることになるであろう。競争、格差、差別が目立つ縦社会の日本(本土)では、翁長知事の態度を不遜に思われるかも知れないが、経済的には豊かでないが、比較的人間皆平等の思想が根付いている横社会の沖縄では高く評価されている。

筆者は『正論』や『WILL』、あるいは書店に並んでいる韓国批判の著書を読み、ある程度は理解出来るようになっていた。しかし、韓国人の気持ちも少し分かるように思える。日本が韓国近代化のために、どれだけ多くのお金、人材を投じたかを強調しても、韓国人は納得しないであろう。何故なら原因は、単に経済問題にあるのではなく、極めて微妙な問題、差別の問題、韓国人としての誇り、自尊心の問題に行き着くからである。今、沖縄で起こっていることも、少し似ているように思われる。沖縄でよく使われている尊厳の問題、アイデンティティーの問題に行き着くのである。今、沖縄で起こっている事は、単なる反基地闘争ではない。植民地状態を脱し、自己決定権を求める何か底知れぬ新しい波が起こっている。

戦後日本は、吉田ドクトリンなどによって、経済繁栄の道を選び、国防はアメリカまかせに

してきた。それは結局、世界からエコノミックアニマルと言われるほど繁栄をもたらしたが、その裏には、沖縄をアメリカ、日本両国の「安植民地」にするという現実があったのである。日本を軍事同盟国にするとしたアイケルバーカーの発言に反発した石原莞爾であれば、属国化した現在の日本の状態は許さないのでなかろうか。さて、普天間問題はどうか解決すべきであろうか。とにかく、沖縄県民がこれだけ反発しているのだから、憲法九十二条、九十五条の精神からしても日本政府は、辺野古新基地工事を中断して、沖縄県との話し合いに応じるべきである。新基地は、政府が憲法を無視し、強権で海のブルドーザーを行使して造れるかも知れないが、県民の反発はかつてないものとなり、日米安保体制も、危うくなるのではなかろうか。間違えば、日本からの分離、独立の動きも加速し、沖縄のスコットランド化が始まるかも知れない。日本国民は、そろそろ、翁長知事の「沖縄が日本に甘えているのでしょうか。日本が沖縄に甘えているのでしょうか」(『世界』五月号)という言葉をも真剣に考えるべきであろう。そして、長い間続いた「犠牲のシステム」(高橋哲哉)を終わらすべきだ。沖縄が日本に甘えているというのであれば、翁長知事も主張しているように、振興策も税制の優遇措置もなくすればいいのであり、そのかわり基地は、歴史的背景を考えても、嘉手納基地も含め、基本的には全て本土で受け持つべきであろう。政府は、普天間基地の危険性だけを強調しているが、この問題は、大田知事以前の白紙に戻し、再検討すべきであろう。

松田勝承(まつだ・かつよし)1944年沖縄生まれ、名護高校卒業、法政大学卒業、1972年名護市役所に入る。財政課、税務課、監査事務局、教育委員会などを経て選挙管理委員会事務局で勲奨退職、退職後は自給の農業をしながら年金生活。教育委員会時代、全国公募展第一回「あけみお展」事務局長を務める、若い時は労働運動にも関わる。地域の芸能史編集にも関わっている。『九鍊』、『九鍊通信』、『旅先通信』編集兼発行人。『沖縄世論』(現『現代公論』)で、石原莞爾を取り上げている。

石原莞爾の「戦後」を歩く

③

岩崎章次

前回、前々回に互って、「石原莞爾生誕百年祭」から「石原莞爾平和思想研究会」の発足まで、そして設立以降の五年間の主だった活動を連綿と綴ってきた。この間、私はほんとうにたくさんの人々に出会うことができた。石原莞爾と共に活動した人たち、石原莞爾の警咳に接した人たち、石原莞爾を研究している人たち、いま石原莞爾の思想を広く行き渡らせようと共に手を携えている同志たち、私はこの恩恵を深く感謝してやまない。返すがえすも残念なのは、今は亡き先達たちにもっといろいろな話を聞いておけば良かったと後悔してやまない。だが、後悔してばかりいても何ら前へ進まない。そこで思い当たったのが、石原莞爾の膨大な著作のなかから、『最終戦争論』や『戦争史大観』のような巷間に流布している著作に比べ、思いのほか知られていない戦後の著作を紹介しながら私

昭和天皇の御製―その時、石原莞爾は連載⑧

紀の国のしほのみさきにたちよりて沖にたなびく雲をみるかな

岩崎章次

昭和十一年（1936年）、三十四歳の時の御製である。「海上雲遠（くもとほし）」というお題の歌会始での作品である。昭和天皇は昭和四年南紀に行幸され、戦艦「長門」の艦上で、民俗学者・博物学者・生物学者である南方熊楠より田辺湾の海洋生態系のご進講を受けられてより、紀の国（和歌山県）がお好きになられたようである。戦後も訪ねられておられる。いっけん実に平淡な歌のようだが、下の句「沖にたなびく雲をみるかな」に立ちこめる黒雲に、この国

の行く末を案ずるお気持ち表されている。まさしくその不吉な予感が当たった。二月、「昭和維新」の断行を掲げ、野中四郎大尉・安藤輝三大尉ら六名の将校を首魁とする青年将校たちが1400余の兵を率いて、首相官邸などを襲撃するクーデターが惹起した。いわゆる「二・二六事件」である。その日、五時四十分、事件の第一報を知った昭和天皇は「とうとうやったか・・・」と声を呑んだという。

石原莞爾大佐は、翌二十七日より戒厳司令部参謀を三月七日まで兼務することになる。

なりの感想を述べてゆこうということなのである。少し気取ったような表題だが、「石原莞爾の「戦後」を歩く」と名づけたのは、石原莞爾と共にすべての人たちと永久平和への道を歩んで行きたいとの思いからである。

★

無題

一、敗戦の最大原因は国民道徳の驚くべき低下にあり、敗戦は国民をして反省・懺悔して国体に対する信仰に徹し（ほとんど全部の自称国体主義者は、敗戦による国体の変革を恐怖せり）、全力を以て最終戦争を準備せしめむとする神意なり。敵側が如何なる手段を用ふるも、間もなく敵の圧迫は排除せられ、我らの努力により十年を俟たずして、内に昭和維新の根本が確立するのみならず、外に東亜連盟精神に基づく日鮮支の道義的協同は速やかに実現すべし。右の判断を速やかに会員に徹底せしめ、自信と感激とを以て猛運動を展開し、敵の進駐以前にその基礎を築くを要す。

二、平和条約を有利にする為の方策。

1、敵の進駐に先立ち、次の革新を断行し、敵を驚嘆せしむ。①国民世論による軍閥政治の打倒を実現す。軍は進んで内面よりこれに策応し、ただちに果敢なる復員を行なひ、御勅諭に反し、政治に参与するに至りし罪を天下に謝し、軍備を撤廃す。次代の軍備は今日の陸海空軍と全く異なるものなること疑ひなく、一時の撤廃は却って、再建設の為に有利なり。②日本は世界第一の民主主義国なることを明らかにす。わが国体は君主主義・民主主義を超越せる存在なり。日本の民主主義は、官憲主義に対するものにして、官僚専制の打倒は刻下の急務なり。③言論・信仰の自由を確立し、特高警察は全面的に廃止す。思想・信仰は国民間の取締りによるべく、これを不可能とする民族は将来性なきものと言ふべし。

2、敵の進駐後に於ける方策。①都市解体・農工一体の実現。②簡素生活の徹底。③遺族、戦災者の救済に全努力を傾注し、国民は丸裸になる覚悟を要す。

三、平和会議に於ける態度

平和会議に於いては毅然たる態度を以て臨む。近代日本の行為は悉く覇道的行為なりしことを天下に謝するとともに、米国の非人道的態度を徹底的に攻撃す。支那に対しては誠意を以て東亜の将来につき談義すべし。東亜の新独立国に關してはあくまでもその独立を擁護する主張をす。八紘一宇の大精神に基づき、ユダヤ民族を徒に排斥するの愚を止め、至誠を披瀝して世界の公正なる世論に懇へしむ。

昭和二十年八月十五日夕刻、山形県酒田市で催された東亜連盟の講演会に於いて会員に訴えた、石原莞爾の戦後の第一声である。それを曹寧柱が筆写したものである。